「運慶　鎌倉幕府と三浦一族」見どころと主要出展品解説

武　士とは？

平安時代中頃に生まれた武士は、地方の反乱を鎮めたり天皇や貴族の下で警護や奉仕をすることで力をつけていきました。その代表が、清和天皇の子孫である源氏と桓武天皇の子孫である平氏です。平安時代末期、天皇や貴族の内部対立に武士が動員された結果、源氏や平氏らの存在は無視できないものとなり、中央政界に進出するきっかけとなりました。この頃、武士は身分として定着し始め武家と呼ばれるようになりました。

鎌倉時代とは？

鎌倉時代とは、一般に源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから鎌倉幕府が滅亡するまでの約 150 年間のことをいいます。鎌倉幕府は、創始者である源頼朝が没すると、将軍に仕える御家人同士の間で対立が激化しました。これを執権北条氏が制し、以後、幕府の実力者となっていきました。文化の面では、念仏の教えや禅宗などの新仏教が庶民・武士・貴族ら様々な人々の間で広まっていきました。

仏　像とは？

仏像とは、信仰の対象である仏の姿を彫刻や絵画で表したものです。狭義には、釈迦如来や阿弥陀如来など、如来の像のことを指しますが、一般的には、菩薩や明王、天などの諸尊像を含んだ広い意味で用いられることが多くなっています。
彫刻で表す場合、日本では木彫像が多く、本展で展示されている仏像も、一軀（出品番号９、金銅製）を除いて、木彫像となっています。
仏像の製作背景はさまざまですが、本展で紹介する像の中には、特定の人物が仏にすがって現世、来世に叶えたい願いを託して作らせたという伝承を持つ像があります。

運　慶とは？

運慶は、12 世紀後半に活躍した仏師（仏像をつくる専門家）です。1100 年代半ばころ、奈良を拠点に活動する仏師の一人・康慶の子として生まれました。奈良・東大寺の金剛力士像が有名ですが、本展ではそれ以前の運慶の活動に注目します。平安末期から鎌倉時代初期まで、その社会の激動期に、東国の武士たちから信頼を得て活躍したのが、まさに運慶です。

三浦一族とは？

三浦一族は、11 ～ 12 世紀にかけて三浦半島を拠点に勢力を築いた武士の一族です。一説には、平為通（たいらのためみち）が武功により源頼義から三浦の地を与えられ、「三浦氏」を称したといいます。源氏によく仕え、源頼朝が鎌倉幕府を開くと、その忠義によって重んじられます。
しかし、のちの世代は北条氏と対立を深め、13 世紀半ばには北条氏によって、その本流が滅ぼされてしまいます。
横須賀・三浦半島での三浦一族の権勢は、こうして失われますが、それまでの間に、造営や造仏に関与した寺院は、この地に多く残されました。仏師・運慶とのかかわりを伝える横須賀・浄楽寺の仏像は、その顕著な例です。さらに、三浦一族の末裔を名乗る家々が各地に残り、また、そのエピソードが江戸時代まで語り継がれています。
本展では、現在までつながる、この三浦一族の文化的な影響力を、ゆかりの寺院と仏像をとおしてご紹介します。

展示室１の見どころ

三浦半島とお寺との関係は古く、運慶以前の早い時期から、仏教文化の華が咲き誇る土壌は、すでに整えられていました。

・衣笠城跡経塚出土遺物
（東京国立博物館蔵）

衣笠城の本丸跡と伝えられる山頂付近から出土したという、青白磁の蓋物。平安時代末頃のもので、景徳鎮産と推測されます。三浦一族の本拠地・衣笠城では、当時としては最先端の、こんな高級品が使われていたのです。

・天王立像（大善寺蔵）

衣笠城跡のふもとにある、三浦氏ゆかりの寺院・大善寺に伝わる像。中尊寺金色堂（岩手県平泉）の増長天像に似ているといわれます。あの豪華な平泉の仏像様式を、三浦氏はいち早く取り入れたのでしょうか。

◎三浦義明坐像
（満昌寺蔵）、国指定重要文化財

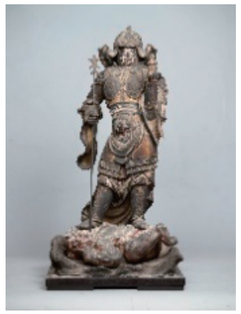
平安時代末期の三浦氏の長・三浦義明（1092 ～ 1180）の坐像。源氏への忠誠心と、衣笠山合戦（1180 年）での壮絶な最期は有名です。源頼朝も、鎌倉幕府創始の功労者として手厚く供養したといわれ、やがて神格化されて、鎌倉時代後期以降、この像がつくられたとみられます。
＊展示は 7 月 31 日まで。

展示室２の見どころ

三浦一族が整えた土壌に運慶が現れ、この地に仏教文化の華が咲きます。運慶工房と三浦一族、そして鎌倉幕府との関わりを伝える、さまざまな仏像を見てみましょう。

◎不動明王立像（右）／毘沙門天立像（左）
運慶作、1189 年（浄楽寺蔵）
いずれも国指定重要文化財

横須賀市芦名の浄楽寺に、阿弥陀三尊像とともに伝わる二つの像。1959（昭和 34）年に毘沙門天立像の内部から発見された木の板（銘札）から、1189（文治５）年、鎌倉幕府の有力御家人・和田義盛と夫人の小野氏が、運慶一門に作らせたものであることがわかりました。運慶作の像は、当時の首都・鎌倉にも残っておらず、それだけでも貴重ですが、製作年や発注者まで明らかになっている点も、ほとんど例がなく、研究上大きな意味があります。



• 毘沙門天立像（清雲寺蔵）

三浦氏のお墓もあるという、横須賀市衣笠の清雲寺に伝わった像です。動きのあるポーズや巧みな衣文の表現などから、鎌倉時代前期の慶派作品とみられます。特徴の一つは、ふっくらとした頬で、幼子の面影を感じさせます。和田合戦（1213 年）では、和田義盛に代わって矢を受けたり拾ったりして義盛を助けたという、なんともいじらしいエピソードをもつ像です。

• 鬼瓦（永福寺跡出土品）

鎌倉市の永福寺（ようふくじ）跡から出土した鬼瓦。表面に木目が残り、木型で成形されたと推測されます。永福寺は、鎌倉幕府の関与のもと建久初～同 5 （1190 ～ 1194）年頃に建立されたお寺で、運慶一門が仏像を製作した可能性があります。この鬼瓦の原型の作者も気がかりですが、いまのところ不詳です。

◎観音菩薩立像（右）／地蔵菩薩立像（左）（満願寺蔵）、いずれも国指定重要文化財

横須賀市岩戸の満願寺に伝わる像です。鎌倉時代初期の運慶工房による製作とみられます。
満願寺は、佐原義連が開いたとも伝わり、この像も、義連が作らせたとの伝承があります。一方で、源頼朝が関与した可能性もあるのではないかと、想像が膨らみます。

◎十二神将立像（曹源寺蔵）国指定重要文化財

古代寺院に起源をもつ曹源寺に伝来した像で、像内から発見された文書により、建久年間（1190 ～ 99）に運慶工房または運慶周辺仏師が製作した可能性が高いと見られます。
すべての像に干支を表わす動物が割り振られ、その印となる動物を頭につけていますが、現在の動物は、製作当初のものではなく、江戸時代の修復の際につけられたもののようです。このとき動物を間違えられてしまった像も多く、たとえば、右端の子神像は、本来のネズミではなく、角のあるヒツジの頭がついています。そしてネズミは、右から 4 番目の卯神像に・・・。このように、現状では、12 体中 9 体が本来とは違う動物を頭につけています。

展示室３の見どころ

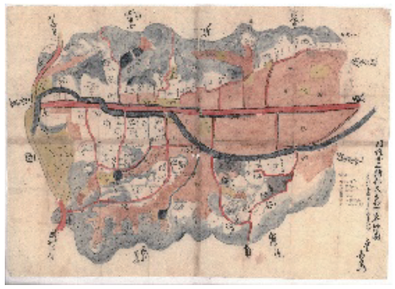
運慶も三浦一族の主だった者も去った後、この地に咲いた華たちは、伝承という新たな種を残します。その種は、後の世の人々によって各地に広められていきました。

• 不動明王立像及び両脇侍立像（常福寺蔵）

もとは、源頼朝ゆかりの浦賀・叶神社 (西叶神社) の別当・西栄寺に安置されていましたが、明治期の神仏分離で、浦賀の常福寺に移された像です。鎌倉時代中期以降の、慶派仏師の系譜を引く作品とみられます。不動明王の胸飾や、各像の装飾部分には、作られた当時の装飾や彩色文様がうっすら残っています。

• 聖観音菩薩坐像（無量寺蔵）

高く結い上げられた髻（もとどり）を特徴とする像で、奈良の古代彫刻や、宋の仏画などを参考にした造形と推測されます。一見して、運慶あるいは運慶工房作と見られる他の出品作と雰囲気が違いますが、慶派の流れを汲むこの地の仏師が、鎌倉時代中期以降に製作した、慶派作品の“発展形”と考えられます。
＊展示は 7 月 31 日まで。



• 相模国三浦郡大矢部村略絵図（横須賀市立中央図書館蔵）

代々、大矢部村の名主をつとめた島崎家伝来の絵図。1825 年のもので、満昌寺や清雲寺のほか、現在は姿を消した三浦一族ゆかりの寺社等を記しており、鎌倉時代以来の寺院や仏像が大切に受け継がれてきたことがわかります。
本展ではこのほか、三浦一族の末裔とされる地域の家々に残された貴重な資料や、三浦一族の伝承を載せた書物などを多数、展示しています。どうぞゆっくりご覧いただき、時を超えて守り伝えられた三浦一族の文化的影響力の一端に触れてみてください。

横須賀美術館
YOKOSUKA MUSEUM OF ART